大学生たちのパーソナル・ネットワークの実態：2010年全国26大学調査から探る

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-01-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 辻, 泉
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6388

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大学生たちのパーソナル・ネットワークの実態
――2010 年全国 26 大学調査から探る――

Personal Networks of University Students in Japan
：From a Questionnaire Survey of 26 Universities in 2010

辻　泉 *
Izumi TSUJI

＜キーワード＞

大学生，パーソナル・ネットワーク，友人関係，全国調査

＜要　　約＞

本論文の目的は，全国の大学生を対象とした質問紙調査の結果に基づき，パーソナル・ネットワーク研究の視点から，若者たちの友人関係の実態について考察することである。主に用いるのは，回答者自身のパーソナル・ネットワークに関する質問項目であり，具体的には，3 名まで重要な他者を挙げてもらい，それぞれについて，基本属性（性別や年齢），知り合った場所，大学生か否か，コミュニケーションの頻度，一緒にすること（共時行動），などを尋ねた。

その他にも，パーソナル・ネットワークの全体的な規模を把握するため，「親友（性別ごとの人数）」「仲のよい友だち」「知り合い程度の友だち」の人数を把握する項目や，友人関係満足度，コミュニケーションスキル，などに関する項目なども適宜参照したが，総じて，いわゆる「意識項目」よりも「行動項目」に重点を置き，詳細な実態把握に努めた。

全体的な傾向として，類似の調査と同様，友人の人数は多いが比較的同質性の高い特徴が見られた。平均人数は「親友」4.43 人，「仲のよい友だち」17.60 人，「知り合い程度の友だち」50.94 人であり，知り合った場所については「高校までの学校で」が最も多く，同性や同年齢の比率も高かった。属性別には，男女別の結果がもっとも違いが見られ，男性のほうが同質性や「ネットワーク密度」が高かった。また同様の点は大都市より地方都市の大学でも見られた。

* 大妻女子大学　人間関係学部　人間関係学科　社会学専攻　非常勤講師

1．本論文の目的

本論文の目的は，今日の若者たちのパーソナル・ネットワークの実態を，大学生を対象とした質問紙調査（以下，2010年全国26大学調査または2010年大学生調査）の結果から明らかにすることである。彼らの日常生活におけるパーソナル・ネットワーク，すなわち他者との関係性に対する関心は非常に高いものがある。例えば，『平成25年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査[1)]』において，「Q3 あなたは，どんなときに充実していると感じますか。」という質問の中で肯定的回答の割合（「あてはまる」＋「どちらかといえばあてはまる」）と答えた割合の合計）の多かった項目を順に列挙すると，1位「恋人といるとき」(89.8％)，2位「趣味に打ち込んでいるとき」(87.6％)，3位「友人や仲間といるとき」(80.3％)という結果になった。

よってここでは，2010年に全国26大学を対象に行われた質問紙調査の結果に基づき，パーソナル・ネットワーク研究の視点から，特に友人関係の実態について考察を進めてみたい。

若者の友人関係をめぐっては，これまでにいくつもの研究が積み重ねられてきた。社会学的な視点からなされたものとしても，「希薄化説」を批判して「選択化説[2)]」を主張する議論や，それを一面では肯定しながらも，その意図せざる結果としてむしろ友人の多様性が減少すると指摘する「同質化説[3)]」などが挙げられる。

本論文においても「同質化説」を継承し，その「同質性」の高い実態を踏まえながら，いかに「異質性」を担保できるか，という問題関心を背後に持ちながら議論を進めて行きたい。よって，より「客観的」に実態を把握するために，意識項目だけでなく行動項目にも重点を置き，特にパーソナル・ネットワーク研究の視点を用いながら，その実態を詳細に把握していきたい。よく言われる対比を用いるならば，「独立変数」として，というよりも「従属変数」としてのパーソナル・ネットワークに注目するが，今後は前者のような発展的研究へとつなげていくことも企図して，まずは丹念に実態を記述していく。

この点において，これまでの若者に関する研究は，おおむね大都市部を対象とすることが多かったが，ここで取り上げる2010年全国26大学調査は，厳密な意味ではランダムサンプリングによって行われたものではないが，青森県から沖縄県にまで至る多様な大学を対象に実施されており，様々な状況下におけるパーソナル・ネットワークの違いを比較検討することができる。具体的には，性別に加えて，大学の所在地，入学難易度，そしてその種別といった項目ごとに，パーソナル・ネットワークにどのような違いが見られるか，またどの項目に顕著に違いがみられるか，といった点を掘り下げていくこととしたい。

2．関連する先行研究の検討

若者の友人関係全般に関する議論は先に紹介したとおりであり，ここではパーソナル・ネットワーク研究の視点から，その実態に迫ろうとした代表的な研究を取り上げてみたい。

これらは大きく分けて，次の二通りの研究に分かれるといえる。すなわち，パーソナル・ネットワークの実態が若者たちに及ぼす何らかの影響をとらえようとする研究と，逆に，社会的属性やその他の変数における違いが，パーソナル・ネットワークの実態にどのような影響を及ぼしているかを考える研究である。前者はパーソナル・ネットワークを「独立変数」として，後者は「従属変数」として，それぞれ注目した研究と言えるだろう。

前者の例としては，就業に困難を抱える若者たちのパーソナル・ネットワークの実態を論じた堀の議論[4)]や，地方都市の若者の就業への影響を論じた石黒の議論[5)]，中高生の社会化過程への影響を論じた工藤の議論[6)]などが挙げられるだろう。

後者の例としては，地方都市と大都市の大学生を比較し，両者の間でのパーソナル・ネットワークの実態の違いを明らかにした大谷の議論[7)]や，趣味の共有によって形成されるパーソナル・ネットワーク（「趣味縁」）と，その趣味による違いについて明らかにした辻泉の議論[8)]などが挙げられ

よう。

いずれにせよ，これらの研究に共通する問題点として，大谷[9]が指摘していたように，友人関係という「主観的」なものを「客観的」にとらえる難しさが存在していよう。

すなわち質問紙調査において，「主観性」を重視して，漠然と「あなたに友人は何人いますか」と尋ねたところで，個々人において友人の定義が違っていれば，回答がかなりばらけてしまうことが想像される。かといって，「客観性」を重視し，「〇〇な人を全て挙げてください。それは何人ですか」と尋ねるにしても，全回答者の，全ての友人に共通するような定義づけを行うのには，困難が伴うであろう。

そこで本調査においては，これらの両方の特徴を兼ね備えた質問を行っている。第一に，「友人は何人いますか」と漠然と尋ねるのではなく，親しさの度合いに分けて「親友／仲のよい友だち／知り合い程度の友だち」のそれぞれの人数を尋ねることで，友人についてのパーソナル・ネットワーク全体の規模をはかる。これはどちらかといえば「主観性」を重んじた尋ね方だが，このように親しさの三段階に分けることで，回答者は想起しやすくなることが予想され，この点は過去における類似の複数の調査でも確認されている。

そして第二に，理想的には，そこで答えられた一人一人について，詳細が掘り下げられればよいが，これは現実的には不可能なため，以下のように範囲を限定した尋ね方をしている。すなわち「現在，あなたが特に親しくしている友だちや，先輩・後輩，恋人などを，3人まで思い浮かべてください」と限定したうえで，その3人について，詳細に尋ねて掘り下げていくという，パーソナル・ネットワーク研究でよく用いられている質問の仕方である。これは「客観性」を重視した尋ね方といえ，やや人数は限られてはいるものの，行動項目が多く尋ねられていることもあり，かなり詳細にパーソナル・ネットワークの実態を明らかにすることが期待できよう。

いずれにせよ，若者たちのパーソナル・ネットワークに関する研究は，さほど多く存在せず，これからのさらなる深まりが期待される分野といえるが，最終的には，「独立変数」として着目し，それが持つ影響を明るみに出していくことを企図しつつ，まずはそのためにも，さまざまな状態におけるその実態を明らかにする，「従属変数」としてのパーソナル・ネットワークの実態を，詳細に記述しつづけていくことが重要だといえよう。本論文もそのような研究となることを企図するものである。

3．調査の概要・分析方法

（1）調査の概要

本論文で用いるデータは，2010年9～10月に全国の26の大学を対象に，青少年研究会（http://jysg.jp/）の有志が実施した量的調査によって得られたものであり，その詳細は以下のとおりである[10]。

＜2010年全国26大学調査の概要[11]＞

- 調査時期：2010年9月下旬～10月
- 調査対象者：社会学系授業を受講する大学生
- 調査対象とした大学：国公立6校，私立20校（うち女子大2校）計26校（首都圏14校，関西圏4校，それ以外の地域8校）
- 入学偏差値の分布（大学受験予備校データより）：43～66，平均53.9
- 調査方法：集合調査
- サンプル数：2831人（1校あたり：22～312人）
- 男女比：男＝36.5%，女＝63.5%
- 年齢構成：18歳＝14.5%，19歳＝34.9%，20歳＝31.8%，21歳＝12.9%，22歳＝4.9%，23歳＝0.8%，24歳以上＝0.2%
- 調査対象とした大学の所在地（回答者ベースでの割合）：首都圏＝50.7%，関西圏＝21.5%，それ以外の地域＝27.8%
- 大学種別：国公立＝12.6%，私立＝73.0%，私立女子＝14.4%
- 部活動・サークル経験率：83.9%
- 第一志望の大学入学率：46.3%
- 大学満足度への肯定的回答（「よかった＋まあよかった」の合計）：55.4%

・おこづかい：平均 38000 円
・アルバイト経験：「現在している」69.3％，「したことがある」20.8％
・暮らし向き：「余裕＋やや余裕」39.0％，ふつう 38.6％，「やや苦しい＋苦しい」22.3％

なお本論文では，主に回答者自身のパーソナル・ネットワークに関する質問項目を用いていくが，それは具体的には，「現在，あなたが特に親しくしている友だちや，先輩・後輩，恋人などを，3 人まで思い浮かべてください（ただし，一緒に住んでいる家族は除きます）」という質問によって挙げられた重要な他者（以下，A ～ C と呼ぶ），それぞれについて，基本属性（性別や年齢），知り合った場所，大学生か否か，コミュニケーションの頻度，一緒にすること（共時行動），などを尋ねていくというものである。

これ以外にも，先にも述べたとおり，パーソナル・ネットワークの全体的な規模を把握するために「親友（さらに男女別に）／仲のよい友だち／知り合い程度の友だち」のそれぞれの人数を尋ねる項目や，友人満足度，コミュニケーションスキル，友人関係全般に対する意識に関する項目なども尋ねた。

（2）用いる質問項目

本論文で取り上げる質問項目については，パーソナル・ネットワークの＜「形式的」な側面に関わる項目＞，＜「内容的」な側面に関わる項目＞，＜その他の項目＞の 3 つに分類可能であり，詳細は以降の分析結果で記すが，概略は以下のとおりである。

＜「形式的」な側面に関わる項目＞

1）ネットワーク規模
・Q22a 親友の数（合計）
・Q22a 親友の数（男）
・Q22a 親友の数（女）
・Q22b 仲のよい友だちの数
・Q22c 知り合い程度の友だちの数
・Q23_0 特に親しくしている人（0 ～ 3 人）

2）ネットワーク構成員属性
・(A)～(C) 男性比率
・(A)～(C) 異性比率
・(A)～(C) 異年齢比率
・(A)～(C) 恋人が含まれる比率

3）知り合った場所（SA）
・(A)～(C) 知り合った場所の多様度（比率[12]）
・(A)～(C) ①高校までの学校で，②大学で，③その他（それぞれの比率）

4）ネットワーク構造
・ネットワーク密度（比率[13]）

＜「内容的」な側面に関わる項目＞

1）コミュニケーション頻度
・(A)～(C) 直接会う頻度（平均得点）
・(A)～(C) メディアを介する頻度（平均得点）

2）共時行動（MA）
・(A)～(C) 共時行動の個数（0 ～ 5）
・(A)～(C) ①政治や社会の会話，②金銭やものの貸借，③悩みの相談，④進路や就職活動についての会話，⑤趣味や娯楽を一緒にする（それぞれの比率）

＜その他の項目＞

1）友人関係の満足度
・Q21a 友だち（恋人を含む）との満足度（平均得点）

2）コミュニケーションスキル[14]（MA）
・Q21b ～ f コミュニケーションスキルの個数（0 ～ 5）
・Q21b 誰とでもすぐ仲良くなれる
　c 表情やしぐさで相手の思っていることがわかる
　d 人の話の内容が間違いだと思ったときには，自分の考えを述べるようにしている
　e まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても，それを上手に処理できる
　f 感情を素直にあらわせる（それぞれの平均得点）

3）その他

・Q21g　多数派志向
・Q21h　選択志向
・Q21i　少数派志向
・Q21j「便所飯」志向
・Q29k　同調志向
・Q29l　差異化志向

（3）分析方法

分析においては，主に平均値の比較を行い，分析結果について統計的な検定を行った（男女別，大学所在地別，入学難易度別，大学種別など）。なお検定結果については，図表中に，以下のようにアスタリスクを用いて有意水準を表記した。すなわち，*** ＝ 0.1％水準で有意（$\alpha < .001$），** ＝ 1％水準で有意（$\alpha < .010$），* ＝ 5％水準で有意（$\alpha < .050$），※＝ 10％水準で有意（$\alpha < .100$）である。また平均値の差の検定においては，極端に大きい値を除外したり，あるいはχ二乗検定においても，セルの期待値が 5 以下になるのを防ぐために，適宜カテゴリーの統合を行ったり無回答は除いたりといった工夫を行った。

4．知見と考察

（1）全体および男女別の傾向

表 1 は，大学生たちのパーソナル・ネットワークの実態について，全体および男女別の傾向を示したものである。以下，1)「形式的」な側面に関わる項目，2)「内容的」な側面に関わる項目，3) その他の項目の順に見ていきたい。

1）「形式的」な側面に関わる項目

全体では，平均人数で言えば「親友」が 4.43 人，「仲のよい友だち」が 17.60 人，「知り合い程度の友だち」が 50.94 人であり，比較的人数の多い様子がうかがえる。またこれらの人数の分布も，2007 年に杉並区で 16 ～ 29 歳の若者を対象にした調査結果と概ね近く（「親友」4.06 人，「仲のよい友だち」15.43 人，「知り合い程度の友だち」47.27 人），その点でも妥当な結果と言えるだろう [15]。

またこれも 2007 年の調査結果と同様に，やはり同質性の高さという特徴が浮かび上がってくる。たとえば異性が含まれる比率は高くなく（2010 年大学生調査の結果 0.16 ／ 2007 年杉並調査の結果 0.19，以下も同様にこの順で対比），とりわけ異年齢の比率は 2007 年杉並調査よりも低い [16]（0.30 ／ 0.16）。

また知り合った場所についても大学以前の「高校までの学校」が圧倒的に多く（0.58），密度も比較的高いといえよう（0.54）。

これらの点を男女別に比較して見ると，同じく表 1 では，男性のほうが「親友」「仲のよい友だち」の人数が多く（それぞれ男性 4.92 人＞女性 4.15 人，18.53 人＞ 17.07 人，以下同様），「ネットワーク密度」が高い一方で（0.60 ＞ 0.51），女性のほうが恋人がいる比率や（0.19 ＜ 0.25），知り合った場所の多様度，別の大学の学生が含まれる比率が高くなっているが（それぞれ，0.22 ＜ 0.27，0.40 ＜ 0.48），こうした男女別の傾向もおおむね 2007 年杉並調査とほぼ同様の傾向といえるだろう [17]。

2）「内容的」な側面に関わる項目

次にコミュニケーションの頻度を 1 ～ 4 で得点化して平均を出してみると，直接会う頻度は男性のほうが高く（男性 2.58 ＞女性 2.40，以下同様），逆にメディアを介するのは女性のほうが高いという対照的な結果になった（2.63 ＜ 2.70）。

また，その相手と共にする行動のパターン（共時行動）の個数を 0 ～ 5 個までカウントして平均を出してみると，女性のほうが多く（2.30 ＜ 2.60），大谷のいう「多重送信」性が見られることとなった。特に，「悩みの相談」（0.56 ＜ 0.81）や「進路や就活についての会話」（0.51 ＜ 0.65）といった，いわば内面開示的な行動において，女性のほうが比率が高くなっているのが特徴的といえよう。こうした傾向も，おおむね 2007 年杉並調査と同様の結果であったといえる [18]。

3）その他の項目

これ以外に，女性のほうで目立った傾向としては，友人満足度や（3.40 ＜ 3.45），コミュニケーションスキルの高さ（平均個数で，2.95 ＜ 3.09），友

表１　全体および男女別ネットワーク特性

	合計			男性			女性			男女の
	N	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	有意差
＜「形式的」な側面に関わる項目＞										
（1）ネットワーク規模										
Q22a 親友の人数（合計）	2767	4.43	3.97	1011	4.92	4.90	1756	4.15	3.29	***
Q22a 親友の人数(男)	2556	1.88	3.03	912	4.42	3.70	1644	0.48	1.06	***
Q22a 親友の人数(女)	2562	2.81	2.85	909	0.86	1.62	1653	3.88	2.81	***
Q22b 仲のよい友だちの人数	2734	17.60	16.40	1003	18.53	18.85	1731	17.07	14.77	*
Q22c 知り合い程度の友だちの人数	2609	50.94	61.81	977	51.05	64.98	1632	50.87	59.86	
Q23-0　特に親しい友だち（0～3人）	2831	2.88	0.52	1033	2.83	0.62	1798	2.90	0.45	**
（2）ネットワーク構成員属性										
(A)～(C)男性比率	2753	0.40	0.39	992	0.84	0.22	1761	0.16	0.22	***
(A)～(C)異性比率	2753	0.16	0.22	992	0.16	0.22	1761	0.16	0.22	
(A)～(C)異年齢比率	2760	0.16	0.25	994	0.18	0.28	1766	0.14	0.23	***
(A)～(C)恋人が含まれる比率	2760	0.23	0.42	994	0.19	0.40	1766	0.25	0.44	***
（3）知り合った場所										
(A)～(C)知り合った場所の多様度(比率)	2751	0.25	0.24	992	0.22	0.24	1759	0.27	0.23	***
①高校までの学校で（比率）	2760	0.58	0.37	994	0.56	0.39	1766	0.58	0.35	
②大学で（比率）	2760	0.33	0.35	994	0.35	0.37	1766	0.32	0.33	*
③その他（比率）	2760	0.10	0.22	994	0.09	0.22	1766	0.10	0.21	
（4）大学生か否か										
①同じ大学の学生（比率）	2760	0.38	0.36	994	0.42	0.38	1766	0.36	0.34	***
②別の大学の学生（比率）	2760	0.45	0.36	994	0.40	0.37	1766	0.48	0.35	***
③大学生ではない（比率）	2760	0.17	0.26	994	0.18	0.28	1766	0.16	0.25	
（5）ネットワーク構造										
ネットワーク密度（比率）	2760	0.54	0.37	994	0.60	0.38	1766	0.51	0.37	***
＜「内容的」な側面に関わる項目＞										
（1）コミュニケーション頻度										
(A)～(C)直接会う頻度（平均得点）	2756	2.46	0.89	991	2.58	0.96	1765	2.40	0.85	***
(A)～(C)メディアを介する頻度（平均得点）	2756	2.67	0.78	993	2.63	0.81	1763	2.70	0.77	*
（2）共時行動										
(A)～(C)共時行動の個数（0～5）	2760	2.49	1.17	994	2.30	1.25	1766	2.60	1.10	***
(A)～(C)政治や社会の会話（比率）	2760	0.20	0.33	994	0.22	0.35	1766	0.18	0.31	**
(A)～(C)金銭やものの貸借（比率）	2760	0.37	0.42	994	0.36	0.41	1766	0.38	0.42	
(A)～(C)悩みの相談（比率）	2760	0.72	0.37	994	0.56	0.41	1766	0.81	0.31	***
(A)～(C)進路や就活についての会話（比率）	2760	0.60	0.41	994	0.51	0.42	1766	0.65	0.39	***
(A)～(C)趣味や娯楽を一緒にする（比率）	2760	0.61	0.40	994	0.65	0.40	1766	0.58	0.39	***
＜その他の項目＞										
Q21_a 現在の友人関係に満足（平均得点）	2827	3.43	0.70	1031	3.40	0.74	1796	3.45	0.68	*
Q21_b ～f　コミュニケーションスキルの個数（0～5）	2831	3.04	1.47	1033	2.95	1.53	1798	3.09	1.43	*
Q21_b 誰とでもすぐ仲よくなれる（スキル①、平均得点）	2827	2.58	0.87	1032	2.54	0.88	1795	2.60	0.86	※
Q21_c 表情やしぐさで相手の思っていることがわかる（スキル②、平均得点）	2827	2.92	0.75	1032	2.87	0.81	1795	2.94	0.71	*
Q21_d 人の話の内容が間違いだと思ったときには、自分の考えを述べるようにしている（スキル③、平均得点）	2828	2.72	0.78	1032	2.76	0.81	1796	2.69	0.76	*
Q21_e トラブルが起きても、それを上手に処理できる（スキル④、平均得点）	2827	2.57	0.73	1029	2.56	0.76	1798	2.58	0.71	
Q21_f 感情を素直にあらわせる（スキル⑤、平均得点）	2825	2.73	0.92	1030	2.68	0.94	1795	2.76	0.91	*
Q21_g 友だちの数は多いほうがよい（多数派志向、平均得点）	2821	2.68	0.96	1029	2.79	1.00	1792	2.61	0.92	***
Q21_h 遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友だちを使い分けている（選択志向、平均得点）	2823	2.99	0.89	1030	2.93	0.94	1793	3.02	0.86	**
Q21_i 大人数でいるよりごく親しい数人の友だちと居るほうがいい（少数派志向、平均得点）	2820	3.39	0.72	1027	3.40	0.75	1793	3.38	0.71	
Q21_j まわりから友だちの少ない人間だと思われるのはいやだ（「便所飯」志向、平均得点）	2824	2.44	1.00	1029	2.41	1.07	1795	2.46	0.96	
Q29k 自分らしさを強調するより、他人と同じことをしていたほうが安心だ（同調志向、平均得点）	2822	2.40	0.87	1028	2.37	0.90	1794	2.42	0.85	
Q29l 他人とは違った、自分らしさを出すことが好きだ（差異化志向、平均得点）	2823	2.81	0.86	1029	2.91	0.89	1794	2.75	0.84	***

人関係における「選択志向」(2.93 < 3.02) などが見られ，結論を先取りすれば，他の属性と比べ，性別において，パーソナル・ネットワークの違いがもっとも際立っていたといえる。

(2) 大学所在地別の傾向

次に表2から大学所在地別の傾向について，先ほどと同様に1) ～3) に分けてみていこう。

1)「形式的」な側面に関わる項目

「親友」の数は地方部のほうが多いが（平均人数で，都市部4.35人＜地方部4.69人），「仲のよい友だち」「知り合い程度の友だち」では，いずれも都市部のほうが多くなっている（それぞれ，17.93人＞16.66人, 56.50人＞35.26人）。特に,「知り合い程度の友だち」の平均人数では，20人近い大きな差が生じており，やはり都市部における接触機会の多さが，ここからも伺える。

これと関連して，同じ大学の学生の比率が高く (0.36 < 0.43)，密度も濃いのが地方部の特徴であり (0.53 < 0.59)，逆に，別の大学の学生の比率は都市部のほうが高くなっている (0.50 > 0.32)。多様な出会いに恵まれた都市部とそうではない地方部という違いが，情報化の進んだ今日の社会でも，一定程度存在していることが伺える。

2)「内容的」な側面に関わる項目

次に「内容的」な側面については, さほど目立った差は見られず，直接会う頻度が地方部のほうが高い (2.43 < 2.55) というほかには，共時行動の個数（＝「多重送信」性）についても有意差は見られなかった。

3) その他の項目

同様に，その他の項目について，友人満足度やコミュニケーションスキルについても有意差は見られず，友人関係の「選択志向」が都市部で多く見られた (3.02 > 2.89) ほかは目立った差は見られなかった。

(3) 入学難易度別の傾向

続けて，表3から入学難易度別の傾向について，1) ～3) の点に分けてみていこう。

1)「形式的」な側面に関わる項目

「親友」の数について平均人数を比べると，入学難易度（低）のほうが多くなっているが（難易度（高）4.29人＜（低）4.60人，以下同様），「仲のよい友だち」「知り合い程度の友だち」の数は入学難易度（高）のほうが多くなっている（それぞれ，18.80人＞16.20人，58.26人＞42.39人）。これについては，入学難易度（高）の大学が都市部に集まっており，先に見た所在地別の傾向といくつかの点で重なっている可能性があるためといえるだろう。

そのほかに，入学難易度（低）のほうが高かったものとして,「高校までの学校で」出会った友人の含まれる比率や (0.56 < 0.59)，大学生以外の比率 (0.12 < 0.23)，密度の濃さ (0.53 < 0.56) などが，逆に，入学難易度（高）のほうが高かったものとしては,「大学」で出会った友人の含まれる比率や (0.36 > 0.29)，同じ大学の学生 (0.40 > 0.35)，別の大学の学生の含まれる比率 (0.48 > 0.42) などが見られた。

2)「内容的」な側面に関わる項目

コミュニケーションの頻度については，直接会う場合も，メディアを介す場合も差が見られなかったが，共時行動の「多重送信」性については，入学難易度（高）のほうが高くなっていた (2.53 > 2.45)。

3) その他の項目

上記の点からすると，入学難易度（高）のほうが友人関係に恵まれた状況にあるといえそうだが，しかしながら興味深いことに，友人満足度，コミュニケーションスキルともに，入学難易度（低）のほうが高い傾向が見られ (3.40 < 3.47, 2.97 < 3.12)，むしろいわゆる「便所飯志向」などは入学難易度（高）のほうが高く (2.49 > 2.40)，友人数の多さや多様性の高さは，むしろ一定の負担を強いる可能性もあるのだろう。

表２　所在地別ネットワーク特性

	都市部			地方部			有意差
	N	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	
＜「形式的」な側面に関わる項目＞							
（1）ネットワーク規模							
Q22a 親友の人数（合計）	2058	4.35	3.82	709	4.69	4.37	*
Q22a 親友の人数(男)	1897	1.76	2.86	659	2.25	3.46	***
Q22a 親友の人数(女)	1904	2.83	2.74	658	2.75	3.15	
Q22b 仲のよい友だちの人数	2028	17.93	16.55	706	16.66	15.92	※
Q22c 知り合い程度の友だちの人数	1926	56.50	66.10	683	35.26	44.10	***
Q23-0　特に親しい友だち（0～3人）	2113	2.86	0.55	718	2.92	0.39	**
（2）ネットワーク構成員属性							
(A)～(C)男性比率	2046	0.38	0.39	707	0.46	0.41	***
(A)～(C)異性比率	2046	0.17	0.23	707	0.15	0.21	
(A)～(C)異年齢比率	2051	0.16	0.25	709	0.15	0.25	
(A)～(C)恋人が含まれる比率	2051	0.23	0.42	709	0.23	0.42	
（3）知り合った場所							
(A)～(C)知り合った場所の多様度(比率)	2046	0.25	0.24	705	0.25	0.23	
①高校までの学校で（比率）	2051	0.58	0.37	709	0.57	0.36	
②大学で（比率）	2051	0.32	0.35	709	0.34	0.35	
③その他（比率）	2051	0.10	0.22	709	0.09	0.21	
（4）大学生か否か							
①同じ大学の学生（比率）	2051	0.36	0.35	709	0.43	0.37	***
②別の大学の学生（比率）	2051	0.50	0.36	709	0.32	0.33	***
③大学生ではない（比率）	2051	0.15	0.24	709	0.24	0.31	***
（5）ネットワーク構造							
ネットワーク密度（比率）	2051	0.53	0.37	709	0.59	0.37	***
＜「内容的」な側面に関わる項目＞							
（1）コミュニケーション頻度							
(A)～(C)直接会う頻度（平均得点）	2047	2.43	0.88	709	2.55	0.93	**
(A)～(C)メディアを介する頻度（平均得点）	2047	2.68	0.78	709	2.66	0.80	
（2）共時行動							
(A)～(C)共時行動の個数（0～5）	2051	2.51	1.16	709	2.45	1.19	
(A)～(C)政治や社会の会話（比率）	2051	0.20	0.33	709	0.18	0.31	
(A)～(C)金銭やものの貸借（比率）	2051	0.37	0.42	709	0.38	0.41	
(A)～(C)悩みの相談（比率）	2051	0.74	0.36	709	0.67	0.39	***
(A)～(C)進路や就活についての会話（比率）	2051	0.60	0.41	709	0.58	0.41	
(A)～(C)趣味や娯楽を一緒にする（比率）	2051	0.60	0.39	709	0.63	0.40	※
＜その他の項目＞							
Q21_a 現在の友人関係に満足（平均得点）	2109	3.43	0.71	718	3.45	0.69	
Q21_b ～f コミュニケーションスキルの個数（0～5）	2113	3.06	1.47	718	3.00	1.47	
Q21_b 誰とでもすぐ仲よくなれる（スキル①、平均得点）	2109	2.59	0.88	718	2.57	0.84	
Q21_c 表情やしぐさで相手の思っていることがわかる（スキル②、平均得点）	2109	2.93	0.75	718	2.89	0.73	
Q21_d 人の話の内容が間違いだと思ったときには、自分の考えを述べるようにしている（スキル③、平均得点）	2110	2.72	0.78	718	2.71	0.76	
Q21_e トラブルが起きても、それを上手に処理できる（スキル④、平均得点）	2111	2.59	0.73	716	2.52	0.71	*
Q21_f 感情を素直にあらわせる（スキル⑤、平均得点）	2107	2.73	0.93	718	2.75	0.88	
Q21_g 友だちの数は多いほうがよい（多数派志向、平均得点）	2104	2.66	0.95	717	2.73	0.96	※
Q21_h 遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友だちを使い分けている（選択志向、平均得点）	2105	3.02	0.87	718	2.89	0.94	**
Q21_i 大人数でいるよりごく親しい数人の友だちと居るほうがいい（少数派志向、平均得点）	2103	3.40	0.71	717	3.36	0.75	
Q21_j まわりから友だちの少ない人間だと思われるのはいやだ（「便所飯」志向、平均得点）	2108	2.46	1.00	716	2.41	1.01	
Q29k 自分らしさを強調するより、他人と同じことをしていたほうが安心だ（同調志向、平均得点）	2105	2.39	0.88	717	2.45	0.85	
Q29l 他人とは違った、自分らしさを出すことが好きだ（差異化志向、平均得点）	2105	2.81	0.86	718	2.81	0.86	

表３　入学難易度別ネットワーク特性

	入学難易度（高）			入学難易度（低）			有意差
	N	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	
＜「形式的」な側面に関わる項目＞							
（1）ネットワーク規模							
Q22a 親友の人数（合計）	1496	4.29	3.86	1271	4.60	4.10	*
Q22a 親友の人数(男)	1360	1.90	2.93	1196	1.87	3.15	
Q22a 親友の人数(女)	1365	2.69	2.66	1197	2.95	3.05	*
Q22b 仲のよい友だちの人数	1479	18.80	17.17	1255	16.20	15.32	***
Q22c 知り合い程度の友だちの人数	1405	58.26	68.49	1204	42.39	51.71	***
Q23-0　特に親しい友だち（0～3人）	1533	2.89	0.50	1298	2.87	0.54	
（2）ネットワーク構成員属性							
(A)～(C)男性比率	1495	0.41	0.39	1258	0.39	0.39	
(A)～(C)異性比率	1495	0.17	0.23	1258	0.16	0.22	
(A)～(C)異年齢比率	1497	0.16	0.25	1263	0.15	0.25	
(A)～(C)恋人が含まれる比率	1497	0.25	0.43	1263	0.22	0.41	※
（3）知り合った場所							
(A)～(C)知り合った場所の多様度(比率)	1497	0.25	0.24	1254	0.25	0.23	
①高校までの学校で（比率）	1497	0.56	0.37	1263	0.59	0.36	*
②大学で（比率）	1497	0.36	0.36	1263	0.29	0.33	***
③その他（比率）	1497	0.08	0.20	1263	0.11	0.24	***
（4）大学生か否か							
①同じ大学の学生（比率）	1497	0.40	0.36	1263	0.35	0.35	***
②別の大学の学生（比率）	1497	0.48	0.36	1263	0.42	0.36	***
③大学生ではない（比率）	1497	0.12	0.22	1263	0.23	0.29	***
（5）ネットワーク構造							
ネットワーク密度（比率）	1497	0.53	0.37	1263	0.56	0.37	*
＜「内容的」な側面に関わる項目＞							
（1）コミュニケーション頻度							
(A)～(C)直接会う頻度（平均得点）	1495	2.47	0.90	1261	2.46	0.89	
(A)～(C)メディアを介する頻度（平均得点）	1496	2.66	0.78	1260	2.69	0.78	
（2）共時行動							
(A)～(C)共時行動の個数（0～5）	1497	2.53	1.15	1263	2.45	1.18	※
(A)～(C)政治や社会の会話（比率）	1497	0.21	0.33	1263	0.18	0.32	※
(A)～(C)金銭やものの貸借（比率）	1497	0.39	0.42	1263	0.35	0.41	*
(A)～(C)悩みの相談（比率）	1497	0.73	0.37	1263	0.71	0.38	
(A)～(C)進路や就活についての会話（比率）	1497	0.60	0.40	1263	0.59	0.41	
(A)～(C)趣味や娯楽を一緒にする（比率）	1497	0.60	0.39	1263	0.61	0.40	
＜その他の項目＞							
Q21_a 現在の友人関係に満足（平均得点）	1529	3.40	0.72	1298	3.47	0.68	*
Q21_b ～f　コミュニケーションスキルの個数（0～5）	1533	2.97	1.48	1298	3.12	1.45	**
Q21_b 誰とでもすぐ仲よくなれる（スキル①、平均得点）	1530	2.54	0.87	1297	2.63	0.86	**
Q21_c 表情やしぐさで相手の思っていることがわかる（スキル②、平均得点）	1530	2.88	0.76	1297	2.96	0.74	**
Q21_d 人の話の内容が間違いだと思ったときには、自分の考えを述べるようにしている（スキル③、平均得点）	1531	2.69	0.78	1297	2.75	0.77	※
Q21_e トラブルが起きても、それを上手に処理できる（スキル④、平均得点）	1531	2.57	0.72	1296	2.57	0.73	
Q21_f 感情を素直にあらわせる（スキル⑤、平均得点）	1527	2.68	0.93	1298	2.80	0.90	**
Q21_g 友だちの数は多いほうがよい（多数派志向、平均得点）	1525	2.66	0.95	1296	2.70	0.97	
Q21_h 遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友だちを使い分けている（選択志向、平均得点）	1526	3.01	0.86	1297	2.97	0.92	
Q21_i 大人数でいるよりごく親しい数人の友だちと居るほうがいい（少数派志向、平均得点）	1524	3.41	0.71	1296	3.37	0.74	
Q21_j まわりから友だちの少ない人間だと思われるのはいやだ（「便所飯」志向、平均得点）	1528	2.49	1.00	1296	2.40	1.01	*
Q29k 自分らしさを強調するより、他人と同じことをしていたほうが安心だ（同調志向、平均得点）	1527	2.40	0.88	1295	2.40	0.85	
Q29l 他人とは違った、自分らしさを出すことが好きだ（差異化志向、平均得点）	1527	2.78	0.86	1296	2.84	0.87	※

（4）大学種別の傾向

最後に表4から大学種別の傾向について，1)～3）の点に分けてみていくが，結論を先取りすれば，これまで見てきた分析に加えて，ことさらに特筆すべきような傾向は見あたらず，しいていえば「私立女子」大学の傾向が目立っていたということであろう。おそらくこの点は，先の男女別の傾向とおおむね重なっているものといってよいだろう。

1）「形式的」な側面に関わる項目

親しさ別にみたそれぞれの友人数ではあまり差が見られないが，しいて言えば，知り合った場所の多様度の高さ（国公立 0.27：私立 0.24：私立女子 0.27，以下同様），別の大学の学生の含まれる比率の高さ(0.42 < 0.43 < 0.62)，密度の低さ(0.51：0.56：0.50）といった点において，「私立女子」の傾向がやや目立つといえるだろう。

2）「内容的」な側面に関わる項目

続いて，コミュニケーションにおけるメディアを介する頻度や（2.48：2.69：2.75），共時行動の「多重送信」性（2.60：2.45：2.63），内面開示的な行動の比率の高さ（「悩みの相談」0.70：0.70：0.82など）において，これもまた「私立女子」の傾向が目立つが，これらは男女別に見た場合の，女性の傾向とほぼ重なっているものといってよいだろう。

3）その他の項目

同様に，友人満足度（3.34：3.44：3.48），コミュニケーションスキルなどの高さ（2.77：3.04：3.30）で，「私立女子」の傾向が目立っているが，やはりこれも「私立女子」大学ゆえ，というよりは「女性」の傾向が反映されたものである可能性のほうが高いといえるだろう。

5．まとめ

結果をまとめよう。ここでも以下の3つに点に分けて，整理していきたい。なお表5-1～表5-3は，ここまでの分析結果をわかりやすくまとめたものであり，統計的に有意な差が見られた項目のみ，不等号でその点を明記してある。これも全体として結論を先取りするならば，他の属性と比しても，やはり男女別の違いが最も際立っているということができるだろう（なお，大学種別については表記を省略したが，これは「私立女子」大学の傾向が，男女別の女性の傾向とほぼ重なっていると考えられるためである)。

（1）「形式的」な側面について

先に触れておけば，大学所在地別の傾向と，入学難易度別の傾向がおおむね重なっているのは，先にも触れたとおり難易度（高）の大学が都市部に集中しているからだと考えられよう。そのことと比較しても，やはり男女別に見た場合に，有意差の見られる項目が多いことが目を引くといえよう。

具体的には，男性は「親友」「仲のよい友だち」の人数が多く，また同じ大学の学生の比率や密度も高い。一方で，女性は，恋人が含まれる比率や別の大学の学生が含まれる比率，知り合った場所の多様度も高く，密度も低かった。よって総じていうならば，「身近で親しい相手との，密度の高いパーソナル・ネットワーク」を取り結ぶ男性と「多様度の高く，密度の低いパーソナル・ネットワーク」を取り結ぶ女性という対比が明らかになったといえよう。

（2）「内容的」な側面について

続いて「内容的」な側面だが，「形式的」な側面以上に，大学所在地別や難易度別では目立った違いがなく，やはり男女別の差が目立っている。これも総じていうならば，「直接会う」男性と「メディアを介し，多重送信性や内面開示性」の高い女性，という対比といえるだろう。

（3）その他について

その他の項目においては，必ずしも大学所在地別と難易度別の傾向が重なってはいないものの，やはり男女別の差が最も目立つことに変わりはな

表４　大学種別ネットワーク特性

	国公立			私立			私立女子			
	N	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	有意差
＜「形式的」な側面に関わる項目＞										
（1）ネットワーク規模										
Q22a 親友の人数（合計）	350	4.13	3.60	2025	4.53	4.14	392	4.21	3.32	
Q22a 親友の人数(男)	318	1.92	2.73	1867	2.15	3.25	371	0.51	1.20	***
Q22a 親友の人数(女)	319	2.62	2.79	1871	2.64	2.83	372	3.83	2.80	***
Q22b 仲のよい友だちの人数	352	18.11	15.87	1996	17.84	16.94	386	15.90	13.72	※
Q22c 知り合い程度の友だちの人数	341	50.06	70.54	1914	50.06	59.44	354	56.50	65.25	
Q23-0　特に親しい友だち（0～3人）	358	2.94	0.36	2066	2.87	0.53	407	2.86	0.58	※
（2）ネットワーク構成員属性										
(A)～(C)男性比率	353	0.43	0.38	2009	0.45	0.40	391	0.16	0.22	***
(A)～(C)異性比率	353	0.18	0.22	2009	0.16	0.22	391	0.16	0.22	
(A)～(C)異年齢比率	354	0.17	0.26	2013	0.16	0.25	393	0.14	0.23	
(A)～(C)恋人が含まれる比率	354	0.26	0.44	2013	0.23	0.42	393	0.23	0.42	
（3）知り合った場所										
(A)～(C)知り合った場所の多様度(比率)	354	0.27	0.23	2006	0.24	0.24	391	0.27	0.24	*
①高校までの学校で（比率）	354	0.52	0.36	2013	0.57	0.37	393	0.63	0.34	***
②大学で（比率）	354	0.42	0.35	2013	0.33	0.35	393	0.24	0.30	***
③その他（比率）	354	0.06	0.17	2013	0.10	0.22	393	0.12	0.23	***
（4）大学生か否か										
①同じ大学の学生（比率）	354	0.47	0.36	2013	0.39	0.36	393	0.21	0.27	***
②別の大学の学生（比率）	354	0.42	0.35	2013	0.43	0.36	393	0.62	0.33	***
③大学生ではない（比率）	354	0.12	0.21	2013	0.18	0.27	393	0.17	0.25	***
（5）ネットワーク構造										
ネットワーク密度（比率）	354	0.51	0.36	2013	0.56	0.37	393	0.50	0.36	**
＜「内容的」な側面に関わる項目＞										
（1）コミュニケーション頻度										
(A)～(C)直接会う頻度（平均得点）	354	2.43	0.94	2010	2.51	0.90	392	2.25	0.78	***
(A)～(C)メディアを介する頻度（平均得点）	354	2.48	0.80	2011	2.69	0.78	391	2.75	0.77	***
（2）共時行動										
(A)～(C)共時行動の個数（0～5）	354	2.60	1.09	2013	2.45	1.18	393	2.63	1.12	**
(A)～(C)政治や社会の会話（比率）	354	0.24	0.34	2013	0.19	0.32	393	0.20	0.33	*
(A)～(C)金銭やものの貸借（比率）	354	0.43	0.41	2013	0.36	0.41	393	0.37	0.42	*
(A)～(C)悩みの相談（比率）	354	0.70	0.35	2013	0.70	0.38	393	0.82	0.29	***
(A)～(C)進路や就活についての会話（比率）	354	0.65	0.36	2013	0.57	0.42	393	0.67	0.38	***
(A)～(C)趣味や娯楽を一緒にする（比率）	354	0.58	0.38	2013	0.62	0.40	393	0.56	0.39	*
＜その他の項目＞										
Q21_a 現在の友人関係に満足（平均得点）	357	3.34	0.69	2063	3.44	0.71	407	3.48	0.67	*
Q21_b ～f　コミュニケーションスキルの個数（0～5）	358	2.77	1.50	2066	3.04	1.47	407	3.30	1.40	***
Q21_b 誰とでもすぐ仲よくなれる（スキル①、平均得点）	358	2.42	0.83	2062	2.58	0.87	407	2.70	0.89	***
Q21_c 表情やしぐさで相手の思っていることがわかる（スキル②、平均得点）	358	2.84	0.72	2063	2.90	0.76	406	3.07	0.65	***
Q21_d 人の話の内容が間違いだと思ったときには、自分の考えを述べるようにしている（スキル③、平均得点）	358	2.61	0.73	2063	2.74	0.78	407	2.72	0.76	*
Q21_e トラブルが起きても、それを上手に処理できる（スキル④、平均得点）	358	2.53	0.69	2062	2.56	0.74	407	2.64	0.71	※
Q21_f 感情を素直にあらわせる（スキル⑤、平均得点）	358	2.63	0.89	2061	2.73	0.92	406	2.84	0.93	**
Q21_g 友だちの数は多いほうがよい（多数派志向、平均得点）	358	2.51	0.96	2057	2.72	0.95	406	2.58	0.94	***
Q21_h 遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友だちを使い分けている（選択志向、平均得点）	358	2.93	0.90	2058	2.99	0.89	407	3.04	0.89	
Q21_i 大人数でいるよりごく親しい数人の友だちと居るほうがいい（少数派志向、平均得点）	358	3.43	0.69	2057	3.38	0.73	405	3.38	0.72	
Q21_j まわりから友だちの少ない人間だと思われるのはいやだ（「便所飯」志向、平均得点）	358	2.45	1.00	2059	2.45	1.01	407	2.40	0.97	
Q29k 自分らしさを強調するより、他人と同じことをしていたほうが安心だ（同調志向、平均得点）	357	2.44	0.82	2058	2.40	0.88	407	2.38	0.87	
Q29l 他人とは違った、自分らしさを出すことが好きだ（差異化志向、平均得点）	358	2.71	0.86	2058	2.83	0.86	407	2.79	0.87	※

表５－１　「形式的」な側面についてのまとめ

	男女別	大学所在地別	入学難易度別
＜「形式的」な側面に関わる項目＞			
（1）ネットワーク規模			
Q22a 親友の人数（合計）	**男性** ＞ 女性	都市部 ＜ **地方部**	高 ＜ **低**
Q22b 仲のよい友だちの人数	**男性** ＞ 女性	**都市部** ＞ 地方部	**高** ＞ 低
Q22c 知り合い程度の友だちの人数		**都市部** ＞ 地方部	**高** ＞ 低
（2）ネットワーク構成員属性			
(A)～(C)異性比率			
(A)～(C)異年齢比率	**男性** ＞ 女性		
(A)～(C)恋人が含まれる比率	男性 ＜ **女性**		高 ＞ 低
（3）知り合った場所			
(A)～(C)知り合った場所の多様度(比率)	男性 ＜ **女性**		
①高校までの学校で（比率）			高 ＜ **低**
②大学で（比率）	男性 ＞ 女性		**高** ＞ 低
③その他（比率）			高 ＜ **低**
（4）大学生か否か			
①同じ大学の学生（比率）	**男性** ＞ 女性	都市部 ＜ **地方部**	**高** ＞ 低
②別の大学の学生（比率）	男性 ＜ **女性**	**都市部** ＞ 地方部	**高** ＞ 低
③大学生ではない（比率）		都市部 ＜ **地方部**	高 ＜ **低**
（5）ネットワーク構造			
ネットワーク密度（比率）	**男性** ＞ 女性	都市部 ＜ **地方部**	高 ＜ **低**

表５－２　「内容的」な側面についてのまとめ

	男女別	大学所在地別	入学難易度別
＜「内容的」な側面に関わる項目＞			
（1）コミュニケーション頻度			
(A)～(C)直接会う頻度（平均得点）	**男性** ＞ 女性	都市部 ＜ **地方部**	
(A)～(C)メディアを介する頻度（平均得点）	男性 ＜ **女性**		
（2）共時行動			
(A)～(C)共時行動の個数（0～5）	男性 ＜ **女性**		**高** ＞ 低
(A)～(C)政治や社会の会話（比率）	**男性** ＞ 女性		高 ＞ 低
(A)～(C)金銭やものの貸借（比率）			高 ＞ 低
(A)～(C)悩みの相談（比率）	男性 ＜ **女性**	都市部 ＞ 地方部	
(A)～(C)進路や就活についての会話（比率）	男性 ＜ **女性**		
(A)～(C)趣味や娯楽を一緒にする（比率）	**男性** ＞ 女性	都市部 ＜ 地方部	

表５－３　その他についてのまとめ

	男女別	大学所在地別	入学難易度別
＜その他の項目＞			
Q21_a 現在の友人関係に満足（平均得点）	男性 ＜ **女性**		高 ＜ **低**
Q21_b ～f コミュニケーションスキルの個数（0～5）	男性 ＜ **女性**		高 ＜ **低**
Q21_g 友だちの数は多いほうがよい（多数派志向、平均得点）	**男性** ＞ 女性	都市部 ＜ 地方部	
Q21_h 遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友だちを使い分けている（選択志向、平均得点）	男性 ＜ **女性**	**都市部** ＞ 地方部	
Q21_i 大人数でいるよりごく親しい数人の友だちと居るほうがいい（少数派志向、平均得点）			
Q21_j まわりから友だちの少ない人間だと思われるのはいやだ（「便所飯」志向、平均得点）			**高** ＞ 低
Q29k 自分らしさを強調するより、他人と同じことをしていたほうが安心だ（同調志向、平均得点）			
Q29l 他人とは違った、自分らしさを出すことが好きだ（差異化志向、平均得点）	**男性** ＞ 女性		高 ＜ 低

いだろう。ここでも，友人満足度，コミュニケーションスキルともに女性のほうが高い結果が現れていた。

（4）結論

冒頭でも触れたように，「同質化説」の問題意識を共有しながらこれらの結果を振り返るならば，やはり全体的には，友人数は多いが，同質性も密度も高い傾向が見られたように思われる。

次に,「形式的」な側面,「内容的」な側面ともに，おおむね女性の方がアクティブで異質性が高かったといえるだろう。またこのことと関連してか，友人関係満足度，コミュニケーションスキルも女性の方が高かったといえる。

かつての若者の友人関係をめぐる発達心理学的な議論で言えば，男女の友人関係は，その予期的社会化過程を反映して，どちらといえば男性のほうが広く浅く，女性のほうが狭く深い関係を築きやすいと長らくいわれてきたが，ここではもはやそうした傾向がほぼ当てはまっていなかったといえるだろう。

また，今日でも大学所在地別による違いがいくつかは見られたものの，相対的には，男女差よりは差が目立たなかったことも象徴的であった。一定の差は残存しつつも，各種のメディアの発達によって，都市部と地方部の違いが狭まりつつあるのか否か，今後も検討を続ける必要があるだろう。

そして繰り返すが，何よりも今日の日本の大学生のパーソナル・ネットワークにおいて，もっとも大きな違いをもたらしているのが，性別であったということが，本論文における最大の知見といえるだろう。

今後はこのように「従属変数」としてパーソナル・ネットワークを記述するアプローチを積み重ねていきながら，それが「独立変数」として，若者たちにどのような影響を及ぼしていくのか，例えば，異質な他者への寛容性であったり，一般的信頼感や政治参加意識の醸成に対して，どのような効果を用いるのか，といった点について，さらなる研究の進展を目指していくことが肝要といえるだろう[19]。

引用文献・注

1）内閣府政策統括官（2014）「平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」（http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf_index.html）

2）浅野智彦（1999）「親密性の新しい形へ」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界－若者たちの東京・神戸90's・展開編』恒星社厚生閣：41-57. 辻大介（1999）「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」橋元良明・船津衛編『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版：11-27.
松田美佐（2000）「若者の友人関係と携帯電話利用―関係希薄化論から選択的関係論へ」『社会情報学研究』社会情報学会，4：111-122.

3）辻泉（2006）「「自由市場化」する友人関係－友人関係の総合的アプローチへ向けて」岩田考・羽渕一代・菊池裕生・苫米地伸編『若者たちのコミュニケーション・サバイバル－親密さのゆくえ』恒星社厚生閣：17-29.
辻泉（2011）「ケータイは友人関係を広げたか」土橋臣吾・南田勝也・辻　泉編『デジタルメディアの社会学』北樹出版，50-66.
土井隆義（2008）『友だち地獄－「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房.

4）堀有喜衣（2004）「無業の若者ソーシャル・ネットワークの実態と支援の課題」『日本労働研究雑誌』46-12（533）：38-48.
堀有喜衣（2006）「若者のソーシャル・ネットワークの構造と機能―高校生の教育から職業への移行を事例として」『自治体学研究』92：22-7.

5）石黒格（2006）「県内若者の就労にパーソナル・ネットワークの多様性が与える影響」『人文社会論叢・社会科学編』16：1-15.

6）工藤保則（2010）『中高生の社会化とネットワーク―計量社会学からのアプローチ』ミネルヴァ書房.

7）大谷信介（1995）「＜都市的状況＞と友人ネッ

トワーク」松本康編『増殖するネットワーク』勁草書房：131-73.

8） 辻泉（2008）「現代日本における若者の市民性（2）～パーソナル・ネットワークと「趣味縁」の実態」（第81回日本社会学会大会 一般研究報告Ⅰ（自由報告）報告資料）.
辻泉（2016）「若者たちのパーソナル・ネットワークと「趣味縁」－2007YCRG杉並調査の結果から」『人間関係学研究』17：145-62.

9） 大谷信介（1995）前掲書.

10） 羽渕一代（2011）「大学生の生活と意識（1）－家族イメージと恋愛行動－」（第84回日本社会学会大会 一般研究報告Ⅰ（自由報告）報告資料）.
岩田考（2015）「大学生の生活満足度の規定要因－全国26大学調査から」『桃山学院大学総合研究所紀要』40（2）：67-85.

11） なお大学の種別とは、国公立、私立、私立女子という3カテゴリを意味し、入学難易度では偏差値55以上を高難易度、54以下を低難易度と分類した。また都市部とは、首都圏、関西圏、中京圏を範域とし、それ以外を地方部として分類した。以下同様。

12） 知り合った場所の多様度については、ネットワークの構成員同士におけるそれを比率化して検討しており、特に親しい他者が3人挙げられている場合であれば、「3人とも知り合った場所が異なる場合」が最も多様度が高い。この点については、以下の論文を参照。
石田光規（2001）「パーソナルネットワークの多様性－その構造と機能」『年報社会学論集』14：126-38.

13） ネットワーク密度については、以下のMarsdenの論文を参照しつつ、互いの親しさは尋ねていないので、関係の総数を比率化した。
Marsden,Peter V.,（1987）Core Discussion Networks of Americans, American Sociological Review, 52：122-31.

14） コミュニケーションスキルについては、相川・藤田の以下の論文による「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」を参照し、同尺度を構成する5つの因子にそれぞれあてはまる項目の中で、適宜因子負荷量の大きい項目を列挙して用いた。因子の種類としては、それぞれ①「関係開始」②「解読」③「主張性」④「関係維持」⑤「記号化」である。
相川充・藤田正美（2005）「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成」『東京学芸大学紀要第1部門教育部門』56：87-93.

15） 辻泉（2016）前掲論文。

16） 辻泉（2016）前掲論文。

17） 辻泉（2016）前掲論文。

18） 辻泉（2016）前掲論文。

19） この点においては、近年における社会関係資本論に関する実証的な研究が大いに参考になるだろう。代表的なものとして、以下のような研究を列挙しておく。
浅野智彦（2008）「若者のアイデンティティと友人関係」広田照幸編著『若者文化をどうみるか？－日本社会の具体的変動に若者文化を定位する』アドバンテージサーバー：34-61.
Putnam, Robert D., with Leonardi, Robert and Nanetti,Raffaella Y.,（1993）Making democracy work : civic traditions in modern Italy, Princeton University Press: Princeton（＝河田潤一訳（2001）『哲学する民主主義－伝統と改革の市民的構造』NTT出版）.
Putnam, Robert D.,（2000）Bowling alone : the collapse and revival of American community, Simon & Schuster: New York（＝柴内康文訳（2006）『孤独なボウリング－米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房）.
Skocpol, Theda（2003）Diminished Democracy : From Membership to Management in American Civic Life, University of Oklahoma Press: Norman（＝河田潤一訳（2007）『失われた民主主義－メンバーシップからマネージメン

トへ』慶應義塾大学出版会）.
Wuthnow, Robert,（1998）Loose Connections : Joining Together in America's Fragmented Communities, Harvard University Press: Cambridge, Mass.

付記

本論文は、平成21年度日本証券奨学財団研究調査助成金を受けた研究（課題名「流動化社会における若者たちのコミュニケーションの変容に関する実証研究－対人関係や自己意識にみる「適応戦略」）の一部である。